

吉成先生

メール遅くなって、大変申し訳ありません。

先日は電話で話しでき、とても懐かしかったです。私が中学生だった時は、自分でも驚くぐらい前のことで、こうやって先生と当時のことを話すのは、なんだか不思議な感覚です。どこまで当時の自分の気持ちを思い出せるのか、正直自信ありませんが、今思うところを書いてみたいと思います。

当時どのような気持ちで学習をしていたかに関しては、はじめはそれまでの道徳の授業と同じように、「正しい答え」「求められる答え」を発言していたと思います。どこから変わったのか、よくわかりませんが、多分誰かが同和問題を自分のこととして語り始めたあたりから、それまでの道徳の授業とは違い、私も自分の周りで起きてる問題として、真剣に考えるようになったんだと思います。私の友達が悩んでる問題、これは一緒に取り組まないといけない問題で、中途半端してると周りを傷つけると思ってました。

当時「差別は外にいる人間の方がよく分かる」と言っていたように、板野にあった差別、特に家での祖父の発言に怒りをぶつけていました。自分たちに何が変えられるのか、どうすれば差別が無くなるのか、本気で考え、悩んでいたと思います。「私が部落出身なら、私の意見ももっと重いものになったのかも…」「年寄りが死んだら、差別は無くなるかなあ…」なんて考えてました。

今思えば、あの頃はアツかったなあー、当時の思いはどこにいったんだろうーと恥ずかしい気分になりますが、あの時、子供ながら一生懸命に燃えていた自分があるからこそ、部落差別を私はしないだろうし、したくないし、自分の子供には決して間違っただ差別を押し付けたくないと思います。今の私には世の中を変えるだけの力も情熱もないけど、自分の子供の考えを導いていくことは出来ると思うので、そこだけは間違えないようにしたいし、それが出来れば、あのとき学んだことは小さな実を結ぶのではないのでしょうか。

当時に振り返って思うことは、先生や友達に恵まれて

たなと言うことです。道徳という場を借りて、思春期の子供たちが、自分の思いの丈を友達や大人(特に先生)にぶつけられたことは、本当に大きな財産だと思います。中学生だった自分は、大人から関心や愛情を受けることは当たり前だと思っていました。しかし自分が大人になって、さらに親になって、どれだけ恵まれていたのか実感します。自分の子育てさえ面倒に思うときがあるのに、全ての先生が、毎年、同じように情熱を持って子供たちを指導するのは無理があるなあーと思うからです。特に今と昔では教育の現場も違ってきていると思うので、同じような取り組みを私の娘が経験することは、多分無いんだろうなとも思います。とはいえ、学校に何も期待しないわけではなく、私の価値観だけでは、子供を間違っただ方向に導くことも大いにあるので、学校で友達や先生から刺激や影響を受け、強くなってもらいたいなあと思います。私に出来る事と言えば、先生や他の保護者と良い関係を作っていくことで、子供たちを良い方向に導いていくことにつながるのかなあと思います。

あの時の学習がなければ、私の差別意識は家の枠から出ることもなかったかもしれないし、家族や大人とあんなに熱を持って意見を交わすこともなかっただろうし、本当に感謝しています。もし自分の子供があんな体験が出来れば、親として嬉しいです。

今思うところはこんなところですよ。恥ずかしいぐらいの浅い意見で、参考になるか分かりませんが、少しでも先生の役に立てればいいなあーと願っています。

気づけば、今年もあと1か月。

寒くなってきましたし、風邪などひかぬよう、どうぞご自愛ください。

吉成先生

もう2月ですが、新年明けましておめでとうございます！研究の方は進んでいらっしゃいますでしょうか？

昨年のメールですが、あまり有意義な内容でなかったのでは…と申し訳なく思います。お正月に帰省した際、〇〇先生とお会いする機会があり、当時の全体学習を解説した本『差別・被差別を超える人権教育』をいただきました。それを読みながら、少しずつ自分の記憶や感情が戻ってきたので、少しメールしたいと思います。自分の思いや考えを文章で伝えることを最近はしていないので、薄っぺらい内容になってしまうと思いますが、どうぞ大目に見てやってください。

まず最初に〇〇先生と吉成先生からこのお話をいただいた時、とても恥ずかしいと言うか、後ろめたい気持ちになりました。それは同和問題を過去のものとして、自分の今の生活から別のところに置いてあるからです。意識して逃げてるわけではありませんが、差別と闘ってるわけでもなく、板野の友達とも疎遠になってるからです。高校、大学、社会人と板野を離れてしまったことで、つながりがなくなってしまっています。なので、「仲間との絆」という言葉を発していた自分、「差別が無くなると信じ、その日まで戦う」と言っていた自分が綺麗事に思え、なんだか情けなくなるからです。とは言え、あの学習があったからこそ、自分たちの地域、友達の現実の問題として、同和問題に真剣に向き合えました。家の中で語られてることは間違ってる！と気付くことが出来たのだと思います。子供は家族が話すことを無条件に受け入れます。それを断ち切ってくれるのがあの学習だったのだと思います。

とは言え、未だに実家に帰って車を運転していて、被差別部落を通る時に少し緊張する自分がいるんです。誰から聞いたのか覚えてませんが、「この辺りで事故したら大変やから、気をつけよ！」って言葉が、まるで言い伝えのように思い出されるからです。でも、学習をした私は(それはどこでも同じこと、この考えは間違ってる…)と自分に言い聞かせます。

主人は「子供に宗教は教えないようにするべきだ。それは洗脳と同じだから。」と言います。確かに子供は親の言うことを無条件に信じます。それは差別も同じだと思います。だからこそ、私は自分の子供に間違った考えを教えないようにするのが、今の私が出来ることだと思っています。

また、母とも当時の自分について話をしました。母は、「もういい加減に同和問題はいいわ！夕飯食べさせてくれ！」と思ったようですが、彼女なりに出した答えが、「部落、人種は関係ない。あなたのことを幸せにしてくれて、稼ぎがあれば誰と結婚してもいい！」だそうです。稼ぎをいうあたりが商売人の家ですね。おかげで国際結婚をすることになったのかもしれませんが。なので、あの同和教育は私や私の家族を人間的に成長させてくれたのは確かだと思います。

後ろめたさを感じていましたが、部落差別が身近にないのも現実です。関東に住んでいるからかもしれませんが…。子供達の活躍の場が広がり、一つの考えに捉われることがなく、豊かに成長してくれることを願っています。そして私達が経験することが出来た、痛みを共有する仲間との語りを、少しでも多くの子供達が持ってくれればと思います。

考えを思うようにまとめることが出来ませんでした、少しでも先生のお役に立てばいいなと思います。

それではインフルエンザなど流行っていますが、お体にはお気をつけください。